

特集「大会支援のためのクリエイション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

全国大会のビジュアルデザイン
Visual Design of the CSAJ Annual Meetings

荒木 紀久子 カラリスト
Kikuko Araki Colorist

1. 概要

2011年千葉大会以来、2年毎に関東地域で開催される全国大会のポスターを担当してきた。このようなポスターを作ることになった経緯は忘れてしまったが、デザイナー上がりで研究の場に疎い私は、普通は白地に墨で縦書きされる看板が学会のスタンダードだという認識もなく、やりたい様にやってしまった。良かったか悪かったかは分からないが、10年経って関東地域以外でもカラフルなポスターが作られているということは、そう悪い提案でもなかったのかと振り返っている。ここに、私が担当した5回の全国大会のポスターのデザインについてまとめてみる。

2. 第42回全国大会 [千葉] '11

実行委員会の度に訪れる千葉大学西千葉キャンパス構内は、けやきの木が印象的であった。初夏から夏にかけては、青々とした葉が茂り木陰を歩くのはとても気持ちが良い。冬には美しい樹形が冷たい空を差して立ち上がっている。千葉大学を会場に行われる全国大会は、この印象的なけやきをモチーフにしたいと思った。実行委員会で最初にポスター案を示す時は、学術団体の研究発表の場である全国大会に、このデザインは絵本のようなのではないかと不安であったが委員会で



図1 第42回ポスター

了承を得て、けやきのポスターをブラッシュアップしていった。けやきの樹形をスペクトルカラーのグリッドで表現した。全国大会の表記は縦組みで、その他はけやきの足元の空白に横組みで置くことで縦長のけやきとバランスが取れたと思う。開催日の5月

中旬は緑が美しい季節であることから、開催日と「42」にグリーンを使用した。デザインを施した名札やタイムテーブルを色分けにして表記をしたのは、千葉大会が初めてではないかと思う。

3. 第44回全国大会 [早稲田] '13

会場となる早稲田大学は都心にあり有名な大学であるが、ポスターのデザインのテーマを見つけることに苦心した。早稲田のスクールカラーのえんじ色は、箱根駅伝やラグビーの試合などの映像でおなじみである。他の大学のスクールカラーは知らなくとも早稲田のえんじ色は誰でもが知るところだろう。そこでこの印象的なえんじ色を使って、色をテーマにポスターを組み立ててみようと思った。ディープトーンで全体をまとめて江戸の雰囲気のある色使いとした。ここには文字情報と色以外はない。「日本色彩学会第44回全国大会」の漢字の一文



図2 第44回ポスター

4. 第48回全国大会 [東京] '17

文化学園大学は西新宿の高層ビル群をすぐ側に控え、新宿中央公園や新宿御苑などの緑にも恵まれた甲州街道沿いに立つ。第48回全国大会のポスターはこの立地をデザインすることとした。古地図に見る山を俯瞰して描く手法にヒントを得て、都会のビル群をグレーの矩形の連続で表し、近隣の公園は円形の集合体



図3 第48回ポスター

色相を、開催日に中間の5色相を置いた。文言の頭には赤から色相環の順に10色を使用した。色ありきのデザインであったので、文言の整理に工夫が要った。グレーと緑の枠の中の文言を矢印に変えることで会場内のサイン計画も統一感のあるデザインでまとめることができた。この時の名札にも公園を表す緑のデザインを施した。

5. 第50回全国大会 [東京] '19

会場となる東京工芸大学は写真学校を母体として工学部と芸術学部からなる大学であるため、写真をテーマとしたポスターにしたいと考えた。工芸大学のスクールカラーはブルー、グリーン、イエローである。そこでフィルムをモチーフに、スクールカラーの3色を取り入れることにした。この時はなかなかデザインがまとまらず、試行錯誤の結果、フィルムが画面を斜めに走るような構図とした。奥の方からモノクローム



図4 第50回ポスター

を一単位としたモチーフの大小の5色の緑で表した。この時の特別講演は「マンセル没後100年に寄せて」であり、マンセルがテーマとなっていた。そこで、グレーとグリーン他にマンセルの基本10色相を使用した。「日本色彩学会第48回全国大会」には主要5

のフィルムが少しずつ明るくなり途中から色相環のグラデーションに変わるの、過去から現在に、そして未来に続くイメージである。白場が多く、引き締めるために日程の下に大きな黄色い正方形を置いた。

6. 第52回全国大会 [ONLINE] '21

第52回大会はコロナ禍の影響でオンライン開催となった。テーマは「色で伝える」。色の見え方が個人の色覚特性によって異なることにスポットを当てたテーマである。ポスターには今回のために制作を依頼したD型特性の画家、黒坂祐氏の油絵が使用された。ポスターに仕立てるに当たって重視したのは絵を壊さないことであった。幸いなことに絵には余白が沢山あったので、それを生かすレイアウトとした。色使いは絵の中にある色を大切に、「日本色彩学会 ONLINE」「色で伝える」は白のようにも見えるがシアンとイエローが20%ずつ含まれている。そうすることで絵へのなじみを良くした。色彩学会のロゴマークは使用規程が定められているために、ダークグリーンで表現する許可を篠田会長より頂いた。絵には左上に小鳥がいて、右下には蛇がいる。「トリとヘビ まったく別の色覚で 見える世界が全然違う それでも みんな 地球のなかま」この絵ののんびりしたとも言える雰囲気のままに、なるべく平易な言葉で「色で伝える」というテーマを表したかった。この絵の制作のために初めて赤い絵の具を買ったと明かされた黒坂氏だが、展覧会等で見る最近の絵には明るく鮮やかな赤やコーラルレッドがよく使われるようになった。



図5 第52回ポスター (左:黒坂氏オリジナル, 右:完成したポスター)

7. まとめ

アイデアの段階から完成まではそれなりの時間もかかったが、当日に名札やサイン計画も含めたビジュアルデザインが大会を彩る様子は嬉しいものであり、成功裡に終わった時には毎回充実感を味わうことができた。オンライン開催時のポスターはアイキャッチ画像としての役割が強いが、会場に紙で張り出される場合にどこまで詳しい情報を盛り込むか、その時の状況に合わせて考えて行くのが良いと思っている。